

HANDSIGN  
TATSU × SHINGO

湘南出身のダンサー発のアーティストとして世界的な活躍を見せているHANDSIGNのTATSUとSHINGO。そんな彼らの地元湘南を巡りながら、その輝かしい軌跡を語ってもらった!

## 01 最初はブレイクダンス、手話ダンスはテレビドラマから?

—お2人ともご出身は湘南なんですよ? 知り合ったのはいつぐらいになるのですか?

TATSU: 僕たち小学校1年からの幼なじみなんです。小中高と一緒に、高校は平塚の高校に通っていたんですけど卒業後はそのまま平塚で2人暮らししてたぐらいの仲なんです。

SHINGO: 5年ぐらい一緒に暮らしてたよね。

—その頃にはダンサーとして2人で活動されていたのでしょうか?

TATSU: 僕らがストリートダンスに出会ったのは中学生の頃でした。学校の仲間たちと商店街でブレイクダンスを始めたのが最初のダンスのきっかけですね。

## 02 純粋にかっこいいと思ったダンスでみんなが感動してくれた。

—てっきり「友だちに耳の聞こえない人がいて……」という理由かと思っていましたが、そういうきっかけだったんですね!

TATSU: そうなんです。純粋に「かっこいい!」と思ったからで、逆に「聞こえない人に届けたい!」

SHINGO: やっぱそれぐらいの時って学校の先輩に憧れがあって、結構田舎の方の学校だったので男子はもう暴走族かブレイクダンスか、みたいな感じだったんですよ(笑)。

TATSU: それから大学でもダンスの熱は続いていて、その時にダンスに手話を取り入れるようになりましたね。

—手話を取り入れるのはどんなきっかけがあったのでしょうか?

TATSU: 「オレンジデイズ」というドラマがきっかけです。耳の聞こえない女の子に妻木君が手話で接しているのがかっこよく見えて、「手話で感情を伝えること、がすごい」と思っていて手話に興味を持ったのが最初ですね。

—という想いで始めていたら、ここまで続けられなかったと思います。

SHINGO: 最初は本当にライトなノリでしたね。当時ぼくらはレゲエなどのブラックミュージックも好きでTATSUなんか髪型が奇抜でした(笑)。ただそういうギャップも

あってか、「なんかヤンキーみたいなのが手話ダンスやってるぞ」みたいに評判が良かったんです。

—それは確かにものすごいギャップですね……(笑)。

TATSU: 僕らは手話ダンスをカッコいいものとしてやっていたんですけど、ある時のクラブイベントで大学生の人たちがすごい真剣に「泣きそうになりました」、「感動しました」って言うてくれたんです。「ダンスで人に感動してもらえる、という

## 03 行き詰まりを感じた日本での活動、そして海外への挑戦。

—純粋にダンサーとして「かっこいいから」という経緯だったんですね!

TATSU: それから2人でいろんなダンスイベントやコンテストに挑戦しなくて、結構優勝したりもしたんですけど、賞金とかで生計を立てていけるものでは到底なかったの、なんかいい方法ないかなと思った時に知り合いから「NYのアポロシアター\*で活躍している日本人がいるよ」って教えてもらったんですよ。

SHINGO: 優勝したら全米のテレビに出て超有名になれるというもので、これは挑戦するしかないと思って英語の曲を英語の手話で憶えて……、その頃僕はポッピン



ことがそれまでなかったの、自分たちのダンスでいるんな人が感動してくれるのを実感したその時から、もっと真剣にこの手話ダンスを突き詰めていこうと思ったんです。

やアニメーションをやっていたのでそれでショーを作って挑戦しに行きました。

—現地でのお客さんの反応はいかがでしたか?

TATSU: この大会の特徴として、ブーイングがすごいというか出演者の8割は途中でブーイングされて返されちゃうんですよ。すごく残酷でみんな泣いて戻ってくるぐらい。これは僕らもダメだなと思っていたら、僕らの時はスタンディングオベーションが起こったんです!

\*ニューヨークの劇場アポロシアターで開催されている、歌手やダンサーのコンテスト「アマチュアナイト」。プロへの登竜門とされ、数多くのスターを輩出した。

## HANDSIGN topic.01

再生回数 1,100 万回以上!  
代表曲「僕が君の耳になる」MV



彼らの代表曲と言えるのが「僕が君の耳になる」。2017年にドラマ仕立てのMVが公開され、現在までに1,100万回以上再生されている感動大作だ!



## 04 優勝、帰国、テレビ放送。そして準備運動で大盛り上がり?

—海外でも「手話ダンス」が通じたんですね!

TATSU: それでどんどん2回戦、年間大会と勝ち進むことができて、年間チャンピオンになることができたんです。

SHINGO: 優勝のコールをされた時は本当に鳥肌が立ちましたね! 日本とは全然違う反応や歓声の大きさは今でも思い出せます!

TATSU: その経歴もあって、帰国してから密着ドキュメンタリーをテレビで放送していただいて、結構視聴率が良かったみたいでそこからいろんな依頼が一気に来るようになりましたね!

—ダンサーとしての活動が実を

結んだんですね! では、そこから歌手活動はどうやって始まったのでしょうか?

TATSU: 海外支援活動でカンボジアを訪れたことがきっかけです。「親がいない子たちにダンスで笑顔になってもらいたい」という企画があって。

SHINGO: 当時、体育の授業がない学校があったので一緒に身体を動かすだけでみんな大興奮なんです。ダンスの前の準備体操するだけでフェスみたいに盛り上がり、正直アポロシアターの時より盛り上がったんじゃないかというレベルで(笑)。



## 05 自分たちの想いを歌詞に、手話にして歌いたい。

—その時はどのような楽曲で踊られたのですか?

TATSU: 「We Are The World」とか有名な曲を手話で教えてみんなで踊りました。そこで子どもたちの楽しそうな笑顔もらった時に、自分たちの想いを歌詞にして手話にして歌いたい気持ちになったんです。それからSHINGOが歌詞を作った「ダンスで笑顔になろう」という内容の曲で手話をつけてやってみせて、そこから僕らの歌のスタートでしたね。

—そこから今のスタイルができていったんですね! そうやって手話を取り入れる上での工夫や大変なことは何かありますか?

TATSU: 手話を作る時は必ず耳の聞こえない方と一緒に作っています。もちろん、自分たちだけで作ろうと思えば作れるんですけど、もともと手話は「聞こえない人の言語、ですから、聞こえない人と一緒に作ることでリアリティが生まれると思っています。

SHINGO: 大変なことと言えば、やっぱり動きが制限されることですね。ダンスってやはり手の動きがすごい重要だから、それが自由にならない難しさはありますね。

## 06 手話として伝えること、ダンスとして成り立っていること。

—確かに! つねに手が見える動きのパフォーマンスを意識しなければいけないんですね!

TATSU: 身体の向きも斜めでも伝わる手話を知っていないと、全部正面を向いたままのパフォーマンスになってしまいますからね。

SHINGO: でも、すべてを聞こえない人に分かってもらおうとするとダンスとしてかっこいいものではなくったりするので、そのバランスのせめぎ合いはいつも苦労しています。

—なるほど、「手話として伝えること」と「パフォーマンスとしての良さ」を両立させることが難しいんですね……。

TATSU: 他にも手を動かす距離や時間で意味合いが変わってきたりすることもあります。ちゃんと手を動かすだけだと「ありがとう」だけ、ゆっくり深くやると「どうもありがとうございます」のような感じになります。

SHINGO: 「ありがとう」も手のひらの向きが違っただけで「やめてください」という意味になったりして、手話って結構ちょっとした動きの違いで伝わる内容が全然違ってきますよ。

## HANDSIGN topic.02

主な活躍や受賞歴 (の一部) を紹介!

- 2009年 NYアポロシアター「アマチュアナイト」優勝
- 2010年 NYアポロシアター「アマチュアナイト」公認パフォーマーとして帰国
- 2012年 海外支援活動プロジェクト(カンボジア)
- 2013年 ろう者のオリンピック「デフリンピック」日本選手団応援ソング制作
- 2014年 神奈川県中学校50校公演プロジェクトスタート
- 2015年 全国高校生手話パフォーマンス甲子園プロジェクトゲスト出演
- 2016年 「DANCE EARTH PARTY」楽曲手話ダンス振付
- 2017年 第23回夏季デフリンピック応援テーマソング制作
- 2018年 東京都パラスポーツ応援プロジェクト「TEAM BEYOND」選出
- 2019年 ローマ教皇来日東京ドーム合同ミサ手話パフォーマンス&振付
- 2020年 青年版国民栄誉賞受賞
- 2022年 日本初となる手話でエンターテインメントを届ける夏フェスを開催